

商品語の〈場〉は人間語の世界とどのように異なっているか(1)

——『資本論』冒頭商品論の構造と内容——

井 上 康
崎 山 政 毅

はじめに

- 〈Ⅰ〉人間語の世界に対する限りでの商品語の〈場〉
- 〈Ⅱ〉『資本論』初版と第二版の位相（以上、本号）
- 〈Ⅲ〉人間語による分析世界としての『資本論』第二版第1章第1節および初版・フランス語版当該部分の比較対照による解説（以下、つづく）
 - (i) 〈富—価値—商品〉というトリアーデ
 - (ii) 『資本論』初版・第二版・フランス語版の対照
 - (iii) パラグラフ①および②の検討
 - (iv) パラグラフ③の検討
 - (v) パラグラフ④の検討
 - (vi) パラグラフ⑤の検討
 - (vii) 「共通なもの」= 価値、「第三のもの」= 商品に表わされた抽象的人間労働
 - (viii) 初版のパラグラフ⑥～⑨の検討
 - (ix) 第二版・フランス語版のパラグラフ⑥、⑦の検討
 - (x) 第二版・フランス語版のパラグラフ⑧の検討
 - (xi) 価値および価値実体の概念の一応の定立

〈Ⅳ〉商品語の〈場〉——価値形態

- (i) 商品をつくる労働の特殊歴史的規定性について
- (ii) 初版本文、その付録、および第二版のそれぞれの価値形態論
- (iii) 価値表現において諸商品は何をどんな風に語るか
- (iv) 〈自然的規定性の抽象化〉過程に関して
- (v) 〈私的労働の社会化〉過程に関して
- (vi) 価値の実体と等価形態の謎性
- (vii) 初版本文価値形態論の形態Ⅱに関して
- (viii) 初版本文価値形態論の形態Ⅲに関して
- (ix) 初版本文価値形態論の形態Ⅳに関して
- 〈Ⅴ〉価値形態論と交換過程論との関係について
 - (i) 価値形態論に対する交換過程論
 - (ii) なぜ、第二版は初版本文の形態Ⅳを捨て貨幣形態を形態Ⅳとしたのか
- 〈Ⅵ〉〈富—価値—商品〉への根源的批判について
おわりに

はじめに

マルクス『資本論』について、とりわけその冒頭の商品論に関しては、過去歴大な議論と論争が積み重ねられてきた。日本においてはとくにその点が目立っており、きわめて細部にわたる検討・議論・論争が続けられてきた。だがその成果は、と言うと必ずしも豊かなものがもたらされたとは言えない。その最大の原因は、マルクスが言う“商品語”¹⁾ というものに対して真正面から取り組んでこなかったことにある。およそ比喩としてしか商品語というものについて捉えられてはこなかったのである²⁾。それゆえに冒頭商品論においてマルクスがいかに商品語の〈場〉と格闘したのかをきちんと捉えることができなかつたのである。マルクスは商品語ということを決して単なる比喩として述べたのではない。資本主義的生産様式が支配する諸社会においては、主体は他でもなく商品

（〈商品—貨幣—資本〉という三形態への相互転化を遂げつつ運動するもの）である。生きた人間たちそれ自身は決して主体ではない。主体として生きた人間は現われない。この社会の経済過程の担い手、この過程の中で自らを一層発展したものとして開き出すもの、過程に内在し過程を内的展開として現出させる実質・実有、——これは商品であってそれ以外ではない。商品はヘーゲルに倣って言えば理念としての存在、すなわち、概念と実在との統一であって、過程の中で、主体として自ら判断し推論するものである。そうである以上、商品が自ら「言語」をもち、商品相互の「意思疎通」をはかっていると考えることは、荒唐無稽ではなくてむしろ自然である。商品が、過程の中で構成し成就する諸事象が、ある「言語」——商品語——によってなされると考えることは自然である。だがもちろん、その「言語」=商品語は、あくまで人間語とは決定的に違っている。

マルクスは『資本論』においてこの商品語が交わされる〈場〉が一体何であるのかを追究し、すさまじい知的格闘を演じたと言っても過言ではない³⁾。とりわけ冒頭商品論においてその闘いはもっとも激しいものとしてあった。これを捉えることなくして『資本論』の理解はない。〈商品—商品世界〉の分析と把握は、人間語によって商品語の〈場〉とわたり合うことである。この点から『資本論』第二版にそくして言えば、第1節およびその補節としてある第2節においてマルクスは、パスカルの言う「幾何学的精神」を大いに発揮し駆使して商品进行分析し、商品に関する諸概念を別括し定立する、つまり人間語の世界の論理的概念的側面を緊張させ、分析的思惟の力を駆使し、これらの概念を定立する。この過程は徹底して人間語による論理的・分析的な世界のものである。これに対して第3節およびその補節としての第4節においては一転して商品語の〈場〉を相手とする。諸商品自身の運動と関係において商品語で「語られる」内容をマルクスは「聴き取り」、それを人間語に「翻訳」し註釈を加える。つまり第1節・第2節で定立された諸概念が単なる思惟の内にある観念像としてではなく、商品世界において諸商品自体の関係・運動によって現実に定立される過程を描き出す。ここでは、再度パスカルの言葉を借りれば、「幾何学的精神」ではなく、むしろ「繊細な精神」が重要となっている⁴⁾。かくて、「第1章 商品」は《第1節・第2節=人間語による分析世界》対《第3節・第4節=商品語の〈場〉の弁証法》という構造を持っているのだ。この対照的な構造について、マルクスは『資本論』初版「第1章(1)への付録 価値形態」の中で、次のように述べている。

もし私が、商品としてはリンネルは使用価値にして交換価値である、と言うならば、それは商品の性質について私が分析によって得た判断である。これに反して、20エレのリンネル=1着の上着または、20エレのリンネルは1着の上着に値する、という表現においては、リンネルそのものが、自分が(1)使用価値(リンネル)であり、(2)それとは区別される交換価値(上着と同じもの)であり、(3)これらの二つの別々なものの統一、つまり商品である、ということを語っているのである。⁵⁾

明らかに、一方の「私[すなわちマルクス(に代表される人間)]が分析によって得た判断」の世界と他方の「リンネルそのものが[...]語っている」商品語の〈場〉とが明確に対比されている。前者は人間の思惟が言語を用いて分析し抽象化し概念を立て範疇化し推論し判断する世界=歴史的・社会的空間、すなわち人間語の世界であるのに対して、後者は諸商品自体が、その運動それ自体が開き出し表現し実現する〈場〉、すなわち商品語の〈場〉なのである。このようにまったく異質の二

つの言葉が投げ立つところを、マルクスは対照させている。しかもこうした異質の二つの世界を対照させることを通じてこそ、そうすることによってはじめて、商品が何であるのかが明らかになるとマルクスは語っているのだ。いささか奇妙な言い方になるが、“きわめて精緻な荒業”をマルクスは強いられたとも言えよう。『資本論』はその結実である。まさにそうであるがゆえに、叙述上きわめて微妙な緊張と困難とをマルクスは背負い込むことになった。困難は次の事情にもっとも顕著に現われている。第1節・第2節においてマルクスは、価値、価値実体すなわち商品に表わされた抽象的人間労働、といった商品に関する諸概念を別決する。だが、実にこれらの概念は、この限りでは決して概念として確定されず、価値形態論における論述をまっしてはじめて確定されるものなのである。つまり、第1節・第2節の議論にある限りでは、価値や価値実体といった諸概念は十全な概念として定立することができないのであり、それにもかかわらず、推論過程から概念指定することが不可避・不可欠なものとなるのである。それゆえ、人間語による叙述は錯綜したものにならざるを得ず、従来から指摘されている価値形態論の難解さにとどまらず冒頭商品論全体の異様な難解さが結果することになった。後に詳細に検討するが、現に『資本論』冒頭商品論の叙述にはいくつかの叙述上の「混乱」がもたらされている。

本稿は、商品語に注目し、そこから『資本論』冒頭商品論の——ちなみに誤解が生じるのを防ぐため一言しておく、われわれが『資本論』冒頭商品論というのは、初版では第1章の「(1) 商品」および「第1章 (1) への付録 価値形態」において、第二版では「第1章 商品」において展開された内容を指している——の構造と内容を照射し、ひいてはマルクスさえも避け得なかった叙述上の「混乱」を指摘しその何たるかを明らかにしようとするものである。

〈I〉人間語の世界に対する限りでの商品語の〈場〉

ここではあらかじめ商品語の〈場〉というものについて、人間語の世界が有する諸特徴との対比において、ごく簡単に述べておきたい。

(i)

人間の言語世界の特徴としてまず次の二つがあげられる。

- ①時間的にも空間的にも線状性＝線形性をなすこと。
- ②対象世界（－自然・社会）に対して「縁付ける (delineate)」あるいは「分節化する (articulate)」ものであること⁶⁾。

説明しよう。

①について。

人間の言語世界は話し言葉にしても書き言葉にしても、線状的性質をもち、この限界を免れることはできない。フェルディナン・ド・ソシュールはこの点について次のように述べている。

言語学で記号の物質的手段を考えてみると、決定的なのはそれが人間の声であり、発声器官の産物だということだろうか。否。けれども、ここに、まだ誰も充分に引きだしたことがない音的素材の重要な性格がひとつある。それは、音連鎖として現出するという性格だ。これは、た

だちに、ある時間的な性格を、ひとつの次元しか持たないという性格を引きおこす。それを線状的性格とってみてもいい。言葉の連鎖は、いやおうなく一本の線となって私たちに現われる。〔…〕さまざまな質の差異（母音間の、あるいはアクセントの差異）は、ただ継起的にのみ現われるにいたる。〔…〕すべては一本の線を成す〔以下略〕⁷⁾

ここでソシュールは、自らの立場上、話し言葉に限定して述べているが、この「線状的性格」は話し言葉に限られたことではない。書き言葉もまた線状的性格をまぬかれない。むしろ、それは言葉の線状的性格＝線形性をより際立たせる。われわれ人間は、いくつもの言葉を同時並行的に、話したり・聴いたり・書いたり・読んだりすることはできない。たった二つでさえ、基本的には不可能である。図式化した図表、文章等を一挙に視覚的にとらえたりすることは可能だが、すなわち、パターン認識ということは可能だが、しかし、この場合でさえパターン認識されたものを言語化しなければならないときには、つまりそれを今一度対象化しなければならないときには（その内容を分析したり、検討したり、あるいはそれを誰かに伝えたり等々する場合）、それを言葉化し、線状的に並べ替えるなければならない。人間はそうする以外にないのである。このように人間語の世界は時間的にも空間的にも線状性＝線形性を一特徴とする。

②について。

①の条件の下で、人間の言語世界には語があり句があり文があり、つまり語と、語の連鎖がある。これは人間語世界が、対象世界（－自然・社会）を「縁付ける」あるいは「分節化する」ということを物語っている。つまり、人間の言語は、対象世界の不断の運動に停止と切断を入れ、それをいわば静的なものとして言語化・概念化するのである。かくして人間語の世界は否応なく、1、2、3、…と数えていくことのできる世界、しかもその有限な世界、つまり可算有限な世界を形づくる。つまり人間（思惟）は、対象世界（－自然・社会）に対して、人間語世界という可算有限世界でもって対し、絶えず運動する対象世界を分析し分節し推論し判断し、概念・範疇をたて、対象世界に停止と切断を入れ、認識作業を遂行する。かくして逆にこのことを対象世界の方から言えば、対象世界（－自然・社会）は人間の言語世界が可算有限であるということの対極として、非可算無限世界をなすと取り敢えず措定することができる。

このような人間語の世界の特質、その絶対的な限界（Grenze）について、ヘーゲルは『哲学史講義』で、ゼノンについて次のように指摘している。

ゼノンは空間と時間の限界、分割、或いは断絶の契機が、ただ単独で十分に妥当する規定だとする。そこから矛盾が生ずるのである。思惟を克服することは困難である。というのは、困難を作るものは常に思惟にほかならないからである。思惟こそ、対象の結合している諸契機の現実の中において、それらを強いて互いに分離し、そうして困難を作り出すものなのである。原罪をもたらしたものは思惟である。人間は善と悪とを認識する知恵の木の実を食べたからである。けれども、この罪を癒やすものもまた思惟なのである。⁸⁾

対象の内で結合し運動している諸契機を「強いて互いに分離」する思惟、つまり対象世界の運動を停止させ、縁付け・分節化する思惟、こうして自ら「困難を作り出す」思惟、——人間の思惟が言語と不可分に結びついたものである以上、このことは絶対に避けられない。対象の内でも有機的に

結合し（実はこの表現自体が致命的に可算化であり、対象を粗大化し、生気を失わせ、打ち砕くものである）、
 不斷に運動しているもの総体を、そのまま・丸ごととらえることは、人間の思惟には不可能なのである。

(ii)

だがしかし、人間の言語世界は対象世界（-自然・社会）を単に縁付け・分節化するだけの平板な可算有限世界をなすわけではない。それはあくまで自然としての人間が生み出す世界、すなわち自然に支えられた世界である。だから人間の言語世界を一つのモデルとして描き出せば、一方に論理的概念的側面の極、他方に超論理的詩的側面の極という二つの極をもち、それら二つの極によって張られた宇宙をなすものとみなすことができる。しかも後者すなわち超論理的詩的側面の極に設えられた、対象世界（-自然・社会）に向けて開かれた〈口〉を通じて対象世界の非可算無限性を〈呼吸〉し、そのことによってはじめて生きたものとなり不斷により豊かな、つまりより一層対象世界にそくしたものとなる世界であると考えられる⁹⁾。これは人間の言語世界全体についてだけ言えることではなく、個々の言葉・語・記号、諸々の概念等についてもそれぞれこうした構造と内的運動をもつものであると考えられるのである。更に言えば、普通の言語の世界だけではなく、人間が対象世界との間に交わす諸々の表現形態、すなわち音楽、絵画、舞踏・舞踊、演劇、数学等々をそれぞれ特有な言語世界とみなせば、それらもまた上に述べたような構造をもって生きたものとして運動していると考えられ得る。それゆえ、先に述べた人間の言語世界の特徴をなす①、②の二つは、非可算無限性をもつ対象世界への〈呼吸〉によって支えられて内的に運動する言語宇宙を、一方の論理的概念的側面の極から捉えたときの在り様に他ならない。

(iii)

以上のわれわれの言語観からすれば、分析哲学的な言語観とそれに対する違和や批判として位置づけられる言語観とを区分しうる。前者は、フレーゲ、ラッセル、クリプキ、クワイン等の言明や著作に表われており、後者は、ソシュール、カントール、ルベーグ等のそれに表われている。前者の言語観は、上に述べた言語宇宙モデルから言えば、対象世界との界面に成り立つ超論理的詩的側面の極、とりわけそこにある〈口〉とその〈呼吸〉に無自覚なものであり、それゆえ一方の論理的概念的側面の極に偏したものであるとすることができる。この言語観によれば、対象世界もまた可算な世界をなすと考えられているように思われるのであり、つまり、可算有限な人間の言語世界と非可算無限な対象世界との間の絶対に相対化され得ない隔絶に無自覚であると思われる。

今述べた分析哲学派言語観の精神様式、すなわち、概念化・可算化・分節化に対する無批判的な思い入れについて、バートランド・ラッセルの『数理哲学入門 *Introduction to Mathematical Philosophy*』（1920年、第二版）の主張に即して少し述べておく。

バートランド・ラッセルは「解析幾何学をも含めたすべての伝統的な純粋数学は自然数論に還元される」¹⁰⁾として自然数論を厳密に確立しようとする。彼は自然数を公理体系化したジュゼッペ・ペアノの公理系を取り上げ、その五つの公理が三つの概念：0、数、後者によって構成されているとし、その極度の抽象性、例えば「0」が必ずしも普通の意味での0である必要がなく、最初の数という意味以上ではないこと、それゆえ、きちんと定義された数列 $\{x_n\}$ ($n \geq 0$) はすべてペアノの公理を満たし、また逆にペアノの公理を満たすものはすべて数列であることに不満を表明して言う。

この0、数、後者という概念がペアノの五つの公理だけでは定義できないで、むしろそれらと独立に意味づけられるべきものであるということは、非常に重要なことである。吾々の数は単に数学の公式を満足するだけでなく、日常の物にも正しく使いうるようなものであって欲しい。すなわち人間は十本の指、二つの眼、一つの鼻をもつと言いうるように数を定義したい。〔…〕吾々は0や数や後者などが、吾々の指や眼や鼻の数を表すために使われるようなものであることを希望する。〔…〕しかしペアノの方法では、数が上の要求にそうように使われているかどうかは明かでない。¹¹⁾

数は通常の事物を数えるのに役立つものであって欲しい。従って吾々の数は単に形式的な性質を満足するものであるばかりでなく、それは一定の意味をもっていなければならない。この一定の意味こそ算術の論理的基礎づけによって始めて与えられるものである。¹²⁾

このラッセルの言明は、数学を狭隘な「学」のイメージに閉じ込めることなく人々の生活世界へ向けて開かれたものにする、と一般には受け取られるかもしれない。だが果してそうか？問題はラッセルの言う「意味」である。そこには彼独特の「意味」が込められている。彼は次のように述べている。論理学は命題を扱うが、「命題はそれ自身真であるか偽であるかで、それ以外の場合は考えられ¹³⁾ず、従って「命題の分析の場合に、非実在的な何ものをも許すべきではないと主張しなければならない」¹⁴⁾、つまり、ハムレットや「一本角の獣、黄金の山、円い四角などのような擬似対象」¹⁵⁾を命題分析に混入させてはならない、と。彼は総括的に言う。

私は動物学が許さないような一本角の獣の存在を、論理学でも許してはならないと主張したい。何となれば論理学は動物学より、より抽象的な、より一般的な性質を対象としているとはいえ、動物学と同じように実在の世界をありのままに取扱うものであるからである。¹⁶⁾

この主張に見られる強い調子にはいささか奇異な感じを抱かざるを得ないが、まさしくここにラッセルの言語観とその精神様式が集約的に現われている。それはどういうことなのか。

ラッセルは彼の「実在世界」(これはわれわれの言う対象世界とは明らかに異なっているが)を可算な世界と考え、その各々の要素から論理の世界の諸要素への単一の対応¹⁷⁾があると考えている。その対応の中には未だ発見されていない対応があるとして、それ(予見された未発見の対応)を発見することが論理学の課題であると考えているように見える。つまり、「実在世界」はそれ自体が論理的であり、それゆえ論理学が自らを厳密に創り上げること、すなわち、いま述べた対応を見出すことが「実在世界」を捉えることであり、また論理(学)によって「実在世界」を説くことができる(「日常のものにも正しく使いうる」)こととなると考えているのである。こうした対応関係が創りだされることが彼の言う「意味」が与えられるということなのだ。非実在を論理学に持ち込むことに強い拒否を示すのはこのためにほかならない。このような限定によって初めて、論理学は純粹な形式に還元されると彼は主張するのである¹⁸⁾。彼にとって論理学はあくまでそして徹底して「実在」の学なのである。だがこうしたラッセルの思考はこの現実世界にあっては転倒している。彼のペアノの公理への不満とあるべきものと彼が考える数の概念への思いは空回りせざるをえないものである。なぜそうではないかについては彼の数概念の規定を検討した上で述べることにする。

ラッセルは数について「数とはある集合の数である」¹⁹⁾と定義し、ここから「0とは空集合だけを要素としている集合の」²⁰⁾数だと概念「数0」を導く。ところがこの空集合に関してラッセルは「一つも要素を含まない集合」²¹⁾と定義している。つまり数1を用いている。たとえ「一つも」という言葉を用いない「要素を含まない集合」と定義したとしても数1を用いていることに変わりはない。なぜなら「要素」が前提されそれが否定されることによって定義がなされているからである。否定されるものとしての存在=有である要素は数を問題にしている以上、厳密に論理的に突き詰めれば数1以外にあり得ないからである。

このようにラッセルは、数1を用いて数0を導き、その上で「後者」を定義し、これによって数1を導こうとする。すなわち循環論である。ところがこの循環論は見かけであって、じつはトートロジーなのである。つまり、数1によって数1を「導く」のである。「後者」についてラッセルは次のように定義している。

今任意の自然数 n に対して、 n 個の要素をもつ一つの集合 a と、 a の中に含まれない一つの項 x とをとれ。 a に x を加えた集合は丁度 $n + 1$ 個の要素を含む。従って次の定義を下すことができる。／集合 a の要素の数の後者とは、 a の要素と a に属していない任意の項 x とからなる集合の要素の数のことである。²²⁾

「一つの集合」、「一つの項」、「 $n + 1$ 個の要素」という具合に数「1」を用いている。これは単に説明だからそれ=数1を使ったというようなものではなく、「項 x 」自体が数1以外ではないからである。つまり「1個の x 」ということだからである。だが実は、数1はもっと以前に前提され用いられていた。ラッセルは、「数とはある集合の数である」(数の定義)を導くために「集合の相似」という概念を規定しているのだが、その相似な集合の定義を「1対1対応」(誤解なきように付け加えると、ここで言う「1対1対応」は「全・単射」のこと、つまり「1対1かつ上への写像」のことである)を用いて行なっているのだ。ここにそもそも数1が用いられていたのである²³⁾。なぜこういうことになってしまうかと言うと、数の概念はそれがどのようなもので、またどのような言語で語られているとしても、必ずその内に数1を含むからである。概念としての数1を含まない数概念系は決してありえない。これに対して数0の概念はきわめて高度な・反省された概念であり、名著『零の発見』²⁴⁾を持ち出すまでもなく、人間の歴史上、人々の多大の営為と時間とが必要だったものである。有=1抜きに無=0はありえない。数1があり一定の数概念系があり、そこから反省的に数0が措定される。かくして数1の概念が、更に数概念系自体が、概念として圧倒的に飛躍するのである。ラッセルは自然数列について、「この数列を1でなく0から始める人は、多少とも数学的教養の高い人である」²⁵⁾と述べているが、「数学的教養が高い」とは一体何を意味するか、またなぜそのように言い得るのかについて突き詰めて考えてはいないように思われる。

ところで、この循環論・トートロジーということでは、F.L.G. フレーゲの『算術の基礎 *Grundlagen der Arithmetik*』(1884年)にもほぼ同様の循環論・トートロジーがある²⁶⁾。

このように見てくれば、先に保留しておいたラッセルの思考の間違い・転倒も、それがどのような間違い・転倒であるのかが解るようになる。ラッセルは数概念(=自然数概念)を論理的に厳密に定立することを目指し、しかもその数概念が日常生活にも用いられるようなものになりたいと述べていた。しかし彼は、彼の言う「実在世界」、あるいは日常の生活世界にいわば「逆らって」論理的に

〈先〉であるべきだとする数0から出発し、それゆえ不可避に数1によってそれを導いたにもかかわらずそのことを隠蔽し、その数0から数1を導くという推論過程を辿ろうとしつつも実際は数1から数1を導き、その後はこの1によって2、3、…、n、…を導くことで自然数体系を導出したのであった。しかもその上に彼は、この自然数体系をもって「実在世界」に臨もうとするのである。対象世界、彼の言う「実在世界」でさえ、それと論理の世界との間には絶対的な隔絶があり、ラッセルが想定するような対応関係はあり得ない。この点に無自覚な、可算化・概念化への過信がある。これが転倒でなくして何であろうか。

そもそもここで取り上げているラッセルの著書は、広い意味での数学の世界から社会に向かって、従って数学あるいは論理数学を学び・目指しそれについて何らかの思考を試みようとする人々に向かって書かれたものである。つまり彼は広い意味での数学の世界に何らかの関心を持つ人々を数学世界に招くために、まさしく数学の世界において数概念について説いているのだ。だとすれば、彼が提示する数概念を日常生活の世界に用いるなどということは、はなから問題にならない。そもそも人間のどのような集団・共同体等においても日常生活の世界に数の概念系は存在し、そこには必ず数1に当たるものがある²⁷⁾。また今日ではどんな数概念系にも数0が存在すると言って良い。各々の集団・共同体において数概念系は十全に機能しているのであって、ラッセルがあらためて言うべき「何か」があるわけではないのである。彼に求められていたのは、このような種々様々な数の概念系に分析を加え、それらを一般化し総括し、概念としてより広くより深いもの、つまりより豊かなものへと鍛え上げていくという数学世界に固有の作業であった。この意味でペアノの方がラッセルよりも正しいのであり、ラッセルのペアノへの不満に問題とすべき根はない。たしかにペアノの公理にいう「数0」は普通の意味での数0に限定されないが、しかし日常生活上の数0を包含しているのであって、普通の意味での数0と理解しても何ら差し支えはないのである。むしろ、ペアノの公理が画期的であったのは、それが自然数全体という無限集合（可算無限集合）概念を明確に定立したことであり、無限を扱う一つの方法を定式化したことであった。これは数学世界に固有な・偉大な貢献であったのである。この対比から言えば、ラッセルがなすべきであったのは、彼の議論がある種の循環論・トートロジーに陥っているのは何ゆえであるのか、そしてまたその循環論・トートロジーは一体何であるのかを、論理学（数学）の世界のあくまで内部において、徹底してその内部において根源的に問うことであった。学問の世界はどのようなものであれ対象世界（-自然・社会）に接する界面をもつ。そこにそれぞれの学的世界固有の〈口〉があり対象世界の非可算無限性を〈呼吸〉する。その〈呼吸〉の在り様として、かの循環論・トートロジーについて考察を加えるべきであった。このような理路に進み得ないところにラッセルの言語観とその精神様式が現われている²⁸⁾。

では、こうした分析哲学派の言語観に対して後者の言語観はどうであろうか。それらは、超論理的詩的側面の極の存在を直観しておりそこに前者への違和や批判を読み取ることができる。だがしかし、後者の人々は人間の言語世界が否応もなく可算有限な世界をなすという絶対的限界について明確な態度をとることができない。したがって人間の言語世界がどのようにして生きたものとなることができるか、そのために対象世界に対してどのような〈対話〉の在り様をもたねばならないかについて明確な態度をとることができてはいないと言うことができる。結局、いずれの言語観も、新しく生み出され形成される言葉や概念、あるいは詩の言葉等に対して、それこそ明確な説明の言語を持ってはいないのである²⁹⁾。

(iv)

このような特質と限界とをもった人間の言語世界に対して、では商品語の〈場〉はどのようなものだろうか。商品の使用価値と価値との統一物である。つまりそれは自然物であるとともに極度に抽象的で純粋に社会的なものである。諸商品は単に諸物(Dinge)であるのではなくて諸物象(Sachen)であり、類としての人間の創造的諸力の結実が転倒し主体化して現われ出たものである。資本主義的生産様式が支配する社会においては、主体はあくまで商品である。個々の人間の自然のおよび社会的諸力の単なる算術和ではない、いわば積分された力の結実として商品はあり、しかもそれが主体として人々に対して君臨している。主体である商品という諸物象の、複雑な運動と諸関係そのものとしてある商品語の〈場〉は、だから人間語世界の諸限界を超え出ていると考えられる。「ひとたたきでいくつもの蠅を打つ」³⁰⁾とマルクスが言った商品語の〈場〉は、決して人間語の世界のように線形ではなく可算ともいえない。「無限」に多重多様な関係のうちに「同時」にひとしく諸事象が生じ、それが示されるというのが商品語の〈場〉だからである。

ところでなぜ、われわれは商品語を問題にするといいながら、商品語の〈場〉という言い方をするのか。その理由は以下である。物(Ding)としての労働生産物は、徹底して抽象的で純粋に社会的な価値を属性とすることによって、商品という物象(Sache)になる。これは、あくまで具体的で自然的な物としての労働生産物が、まさしく抽象的社会的な独特の関係・運動の〈場〉に入ることによってである。ここで重要なのはこの特有の関係・運動の〈場〉が個々の労働生産物よりも〈先〉にあるということである。あらかじめ在るものとして〈場〉を措かなければならない。資本主義的生産様式が支配する社会を対象とする限りこのことは不可避・不可欠であり、ここで商品〈場〉の起源を問うことは無意味である。そのためにマルクスは、『資本論』冒頭商品論の核をなす価値形態論において「単純な価値形態」を単なる物々交換とは違ったものとしてはっきり区別し、この価値形態も商品〈場〉におけるものとして議論しているのである³¹⁾。個々の労働生産物が一体どのようにして現実的に商品になるのかが問題であり、このことが可能なのは、個々の労働生産物があらかじめ存在する商品〈場〉に投げ込まれることによってである(ここで一言注意。われわれが言う商品〈場〉とは商品流通の場という意味ではまったくない。資本主義的工場生産される労働生産物は、その工場の資本主義的生産過程において時々刻々商品〈場〉に投げ込まれているのである)。個々の商品が過程の主体になり得るのはこの〈場〉すなわち商品〈場〉に組み込まれ支えられるがゆえである。労働生産物という単なる自然物から商品という社会的な物象へのすさまじい変換の〈場〉があるのだ。このことは、商品が必ず・いつも固い・手で触れるような対象物であるわけではなく、人間の活動のあらゆる所産・結実あるいはその発露そのものが商品になり得ることを考えれば良く理解できることである。例えば、非物的な労働生産物である商品が存在する。種々の芸術行為・活動や医者が行なう医療行為そのものや教師が行なう教育活動そのものといった諸商品であり、こうした諸商品の存在は、多くの抗議や憤激あるいは自己陶醉を呼び起こす、あるいは詐欺や欺瞞の手段になる、等々にもかかわらず厳然たる現実であり、この現実はまさしく商品〈場〉というものがあってはじめて可能なのである³²⁾。かくして、この商品〈場〉に照応し・付属したものとして商品語の〈場〉なるものを考えることができるし考えざるを得ない。過程の主体たる諸商品の運動、すなわち主体としての「判断」・「推論」等々としてあるもの、そうしたものとしてしか捉えられない諸商品の関係・運動を述べるものとして商品語を措くしかない以上、それはある何らかの〈場〉としてしか人間語には捉えられないものだからである。そもそも商品語に語や句それらの連鎖や、また節や文章といっ

た分節化された・可算化されたもの・諸範疇を考えるいわれはまったくない。語や句などといったものを想定する人間語世界の呪縛から自由でなければならない。そうした呪縛から解かれた思考が必要であり、取り敢えず商品語の〈場〉というものを措き、その〈場〉の固有の運動として、あるいはその〈場〉の〈励起〉として商品語を捉える必要があるのである。もちろん、場 (field; Feld) という言い方は、電磁場とか場の量子論といった自然科学における場の概念のアナロジーであるが、しかし単にアナロジーにつきるものではない。なぜなら《商品〈場〉－商品語の〈場〉》という対象は自然としての対象ではなく、人間社会としてのそれだからである。そこには〈意識－無意識〉からはじまる人間精神の特有のエネルギーが渦巻き・横溢しているからである。

ところで、商品語の〈場〉が可算ではないとしても、その非・可算性の度合い・水準を問題にすることは可能である。マルクスは商品たちの語るところを聴き取る形で次のように『資本論』に書いている。

もし諸商品がものをいうことができるとすれば、彼らはこう言うであろう。われわれの使用価値は人間の関心をひくかもしれない。使用価値は物 (Ding) としてのわれわれにそなわっているものではない。だが物的に [dinglich] われわれにそなわっているものは、われわれの価値である。われわれ自身の商品物 [Waarendinge] としての交わりがそのことを証明している。われわれはただ交換価値として互いに関係し合うだけだ、と。³³⁾

商品はあくまで使用価値と価値との統一物であり、必ず使用価値という〈体〉をもち、それなしではあり得ない。だがしかし、商品は自らのこの〈体〉を〈忘れてしまう〉ということだ。使用価値は物としての自分に備わっているものではない、と言うのだから。自然物としての労働生産物は、商品〈場〉という変換〈場〉に投げ込まれることによって社会的な物象たる商品になる。だが商品になるや否や、諸商品は自らの〈体〉つまり自然的諸規定性を〈忘れてしまう〉というわけだ。つまり、諸商品は、使用価値に現われる自然、その諸規定性から剥がれ、まったくの抽象的な社会性としていわば宙に浮き上がってしまうということだ。このことこそが、《商品〈場〉－商品語の〈場〉》のもつ抽象的普遍としての猛烈な力と決定的な限界とを示しているのである。その抽象的普遍としての力は個々の生身の人間を圧倒し翻弄し引き裂き食い殺す等々するのであるが、しかしそれが抽象的普遍であるということによって、その限界 (Grenze) が制限 (Schranke) へと転化する可能性を示してもいるのである³⁴⁾。言い換えれば、商品語の〈場〉の非・可算性はきわめて抽象的な水準のものでしかないことが予想され、自然そのものの非可算性に比してそれは底の浅いものでしかないと想定される。まさしくここに、類としての人間が、すなわち自然の不可分な一部でもある類としての人間が、《商品〈場〉－商品語の〈場〉》として転倒して立ち現われている自らの類としての在り様をまさしく内在的に超克していくことができる物的な根拠もまた示されているということなのである。

『資本論』は、商品とは一体何であるのかを問いそれを解き明かすことを通じて、商品語の〈場〉のこの特質、つまり人間語の世界を超え出た水準をもつものであることを明らかにすると共に、それが超克され得ることを示したのではないだろうか。すなわち、人間の類的性格が《商品－商品語の〈場〉》として完全に転倒して現われている現実を、自然に支えられ、かつ自然の不可分な一環として存在する人間、この類としての人間が、自らの自然的社会的な創造的諸力によって超克し得ることを

も明らかにしたのではないか。このような可能性を念頭におきつつ、われわれは上に述べた人間語世界の特徴を導きの糸として『資本論』が説いた商品語の〈場〉を考察していくことにしよう³⁵⁾。

〈Ⅱ〉『資本論』初版と同第二版の冒頭商品論の位相

本稿の主たる目的は『資本論』冒頭商品論の構造と内容が何であるのか明らかにすることにある。この作業はもちろん同書の初版と第二版を中心のテキストとしてなされねばならない。とりわけ次の三点にわたる作業をきちんと行なう必要がある。第一は、言うまでもなく『資本論』初版(1867年9月)から第二版(1872年7月—1873年6月)への書き換えがどのような目的をもってどのようになされたのかをフランス語版(1872年9月—1875年11月)をも参照しつつ綿密に検討することである。このために第二に、『資本論』のための直接の・本格的な草稿の最初のものである「1857—1858年草稿」(『経済学批判要綱』)から『経済学批判』第1分冊(1859年)、および「1861—1863年草稿」を踏まえ、『資本論』に到るまでにどのような課題があり、それがどのように解決されていったのか、また残された課題はなかったのかを確認することである。そして第三に、マルクスが死んだ1883年中にエンゲルスの手によって出された『資本論』第三版(1883年末)における第二版からの変更がどのようなものであり、それがマルクス自身の指示によるものであるのかどうかを可能な限り正確に同定することである。

先ず第一の点であるが、初版から第二版への書き換えについてマルクスは第二版の後記に次のように書いている。

第1章第1節では、それぞれの交換価値が表現される諸等式の分析による価値の導出が、科学的にいっそう厳密になされている。また、第一版ではただ暗示されているだけの、価値実体と社会的必要労働時間による価値量の規定との関連も、明確に述べてある。第1章第3節(価値形態)は全部書き換えたが、これはすでに第一版の二重の記述から見ても必要なことだった。——ついでに言えば、あの二重の記述は、私の友人ハノーファーのドクトル・L・クーゲルマンにすすめられて書いたものである。1867年の春、私が彼のもとを訪れていたとき、最初の校正刷がハンブルクからきた。そして、彼は、大多数の読者にとっては価値形態の補足的な、もっと教師的な説明が必要だということを、私に納得させたのである。³⁶⁾

初版から第二版への冒頭商品論に関する書き換えの目的の中の二つに、交換価値から価値を概念的に明確に区分すること、および価値形態論があることが述べられている。この内の価値形態論に関する書き換えについては従来から注目され多くの言及・議論がなされてきたが、交換価値から価値を概念的に明確に区分するための書き換えについてはきちんと検討されてきたとは言い難い。実にこの書き換えをマルクスは徹底して行なわず、それゆえにこの部分で叙述上の混乱が生じたとわれわれは考えており、〈Ⅲ〉で詳しく検討する。

また、価値形態論の書き換えについては、初版本文の価値形態Ⅳが削除され、形態Ⅳとして貨幣形態が取り入れられたことによって、きわめて大きな負の問題を引き起こすことになったとわれわれは判断しており、これについては本稿後段の〈Ⅳ〉および〈Ⅵ〉で詳しく検討することになる。

次に第二の点である。「1857-1858年草稿」から『資本論』初版および同第二版、またその改訂作業の中で主に三つの課題があった。第一は、商品に表わされた労働を二重性において・二重の労働として把握すること（あくまで商品に表わされた労働の二重性であって、決して生きた・流動状態にある労働の、ではない。後者は二重性としてあるのではなく、商品に表わされた二重の労働から反省的に捉え返されることによって二面性として把握されるものである）、第二に、価値を交換価値から概念的に区分し、交換価値を価値の表現様式・現象形態として把握すること、第三に、交換価値、すなわち価値の現象形態について価値形態論として展開すること（労働生産物がどのようにして現実的に商品になるのかを説くこと、別言すれば「すべての商品の貨幣存在」³⁷⁾を説くこと）、以上であった。第一の課題を基礎に、これを解決する作業が第二・第三の課題を鮮明にし、それらの課題の解決を促進することとなる。第一・第二の課題の解決は、商品論の諸概念——価値、価値の実体（＝商品に表わされた抽象的・人間労働）、価値の形態たる交換価値、価値を形成する労働等——をとりあえず人間語によって分析的に定立することである。だが、第三の課題の解決とは、それらの概念が諸商品自身の実際の交換関係・価値関係において現実的に定立される在り様を人間語によって翻訳的に叙述し註釈することである。

第一の課題は、「1857-1858年草稿」では未だ萌芽的に取り扱われているだけで、解決されたとは言えない。この課題は『経済学批判』第1分冊においてようやく解決されると言って良い。第二の課題は『資本論』初版によって一応解決される。一応、と言うのは、初版では価値自体を分析的思惟によって導出することがなされ得ておらず、価値が議論の前提として、もしくは仮言的に措かれてしまっているからである。つまり、価値自体を分析的に導出する課題が残されてしまったのである。この課題の解決が『資本論』第二版で図られるが、完璧にそれがなされたとは言いがたいし、第三版のための改訂作業においても克服されたとは言えない。なぜならば、叙述上のある種の「混乱」が第二版には生じているからであり、これが第三版でも克服されてはいないからである。次に、第三の課題の解決であるが、それは『資本論』初本文で果たされたと言ってよい。ただ、初版では価値を分析的に導出せずいわば仮言的に前提して議論しているので、その影響が初本文の価値形態論にも明らかに露出している。ところで、この初本文の価値形態論は、理解するのが極めて困難だとマルクス自身が述べたものであり、それゆえ、意欲ある読者、とりわけ意欲ある労働者の読者のために「初版付録」が書かれ、それに基づいて第二版の価値形態論があるわけであるが、この書き換えは論理展開上の新たな問題を生じさせることとなった。またフランス語版は第二版の到達地平と新たな問題点を同じくしている。

最後に第三の点、すなわち、第二版から第三版への書き換えの点である。どこが書き換えられたのかはもちろん第二版と第三版とを比較対照すればすぐにわかるわけだが、問題は書き換えがマルクス自身の指示によるものなのかどうかということである。第三版はマルクス死後、エンゲルスの手によって刊行されたものなので、これは重要な問題なのだが、事実を確定するには相当の困難がある。資料としては、MEGA, II/6に収録された草稿「『資本論』第1巻にたいする補足と変更」や、MEGA, II/8に収録された第二版のマルクス自用本への書き込みがきわめて重要なものであるが、これらだけでは不明な点が残らざるを得ない。今後なお少なくない時間と多くの研究者の努力が必要であろう³⁸⁾。

以上の点はともかく、われわれにとって重要なのは、冒頭商品論における書き換えである。従来第二版から第三版への書き換え問題に関しては、フランス語版に基づく書き換え（蓄積論の部分が中

心) が主に問題にされ研究されてきたのであって、冒頭商品論に関してはほぼまったくと言って良いほど目を向けられてこなかった。それゆえわれわれは、上記の資料を最大限利用しつつ、今日なしう限りの作業を行うことになる。

こうした厳密なテキスト批判が必要である。その点からすれば、第四版(1890年12月、いわゆるエンゲルス版)のテキストとしての意義は大きくはない。先に触れた『『資本論』第1巻にたいする補足と変更』や第二版自用本への書き込み等を含めてマルクス自身による改訂作業の全容が明らかになれば、第四版についてはエンゲルス編集版という独立の著作としてその歴史的意義が確定するであろう。この意味では、われわれの目的からすれば、1865年6月のマルクスの講演記録『価値・価格および利潤』(1897年英語版、1898年ドイツ語版)³⁹⁾、そしてマルクス自身によってほぼ全面的に改定された、ヨハン・モストによる「入門書」である『資本と労働——カール・マルクス著『資本論』のやさしいダイジェスト』第二版(1876年)のそれぞれ当該部分もまた参考文献としては重要である。前者が『資本論』初版に、後者が同第二版に対応する文献であり、初版から第二版への書き換え問題に関して無視できないものである。

ともあれ、本稿の目指すところからすれば、初版および第二版、さらにフランス語版という確定したテキストを綿密に検討することをいくつかの参考文献・資料で補うことによって目的は十分に達せられるであろう。

(以下次号)

註

以下では、Marx Engels Gesamtausgabe を MEGA と略し、たとえば MEGA, II /1 は、同全集の第 II 部第 1 巻を指すものとする。訳文については、現行版(第四版)『資本論』は資本論翻訳委員会訳の新日本出版社版(1997年)を、『経済学批判 第1分冊』(1859年)をはじめとする資本論草稿については資本論草稿集翻訳委員会訳『資本論草稿集』(全9巻、1981-1997年、大月書店)を、初版については岡崎次郎訳『資本論第1巻初版——第1章および付録「価値形態」』(国民文庫、1976年)および江夏美千穂訳『初版 資本論』(幻燈社書店、1983年)を、第二版は江夏美千穂訳『第二版 資本論』(幻燈社書店、1985年)を、フランス語版については江夏美千穂・上杉聰彦訳『フランス語版 資本論(上)』(法政大学出版局、1979年)を、それぞれファクシミリ復刻された原テキストおよび MEGA 当該巻にあたり、必要に応じて改訳しつつ用いた。上記以外のマルクスおよびエンゲルスのテキストは Marx Engels Werke (MEW と略)にあたり、大内兵衛・細川嘉六監訳『マルクス=エンゲルス全集』(大月書店、1959-1977年)を適宜改訳して用いた。

- 1) マルクスは商品語について『資本論』第二版第1章第3節つまり価値形態論の中で次のように述べている。「商品価値の分析がさきにわれわれに語ったいっさいのことを、リンネルが他の商品、上着と交わりを結ぶやいなや、リンネル自身が語るのである。ただ、リンネルは、自分だけに通じる言葉で、商品語で、その思いを打ち明ける。労働は人間的労働という抽象的属性においてリンネル自身の価値を形成するということを言うために、リンネルは、上着がリンネルに等しいものとして通用する限り、したがって価値であるかぎり、上着はリンネルと同じ労働から成り立っていると言う。リンネルの高尚な価値対象性は糊でござわしたリンネルの肉体とは違っているということを言うために、リンネルは、価値は上着に見え、したがって、リンネル自身も価値物としては上着と瓜二つであると言う。ついでに言えば、商品語も、ヘブライ語のほかに、もっと多くの、あるいはより正確な、あるいはより不正確な、方言をもっている。たとえば、ドイツ語の Werthsein は、ロマンス語系の動詞、valere, valer, valoir に比べると、商品 B の商品 A との等置が商品 A 自身の価値表現であることを言い表わすには不適切である。」(MEGA, II /6, S. 85.)。引用中の「ついでに言えば」以下の文言、とくに「方言」というのは、これこそある種の比喩と捉えるべきものである。商品語を比喩と捉える立場からすれば、二重の比喩ということになるが、マルクスは商品

語を単なる比喩と考えていなかったため、「方言」という言葉を用いているのである。資本主義的生産様式が支配的な社会の主体は商品であり、具体的な個人に対して君臨している。したがって、商品語は主体の「正統」な言葉であり、それに対する個人（商品所有者）の言葉は「通俗的」で「なまった」、さらに往々にして不正確で曖昧なものでしかない、ということなのであろう。ここには商品の（世界的な）権力性も示されている。マルクスはこうした事態を「方言」という比喩で示したとわれわれは考えている。さらに商品が運動する〈場〉は貨幣とそれ以外の商品とに分裂・二重化するが、貨幣による価格表現のうち、一切の地域性からの超脱・異なる国同士の交易に伴う国際性が示される。そして世界資本主義の成立によって世界貨幣が生み出され、商品の価値に表わされる抽象的普遍性は最高の形態を獲得する。生きた個人があくまで国や地域といった諸条件に規定・束縛されつづけることとの隔絶が、こうして比喩的に示唆される。ただ、マルクスの時代におけるこの隔絶の水準は、今日のそれと比べると、なお低い段階にあった。それゆえ、マルクスの比喩をわれわれが十全に受けとめるためには、商品語の世界性に反射する「方言」の様態について、注意深い比較・測定がぜひとも不可欠である。ところで、この部分にはユダヤ系であったマルクスのユダヤ人とその歴史、またユダヤ教とキリスト教への痛烈な皮肉や嘲笑が込められているに違いないが、その問題には本稿ではふれないこととする。

2) 商品語という言葉に注意を向けた数少ない一人である廣松渉は次のように述べている。「マルクスは『価値形態論』の内部では、殆んどもっぱら『商品語』で語って」（『資本論の哲学』、現代評論社、1974年、p.131.）いる、と。このように廣松は、価値形態論が商品語の〈場〉であることを明確に把握しているかにみえる。だがこの廣松の言明は、彼の哲学の根幹である「四肢的構造論」を価値形態論に適用しようとするなかでのものなのである。彼は価値関係の中に宇野弘蔵と同様に商品所有者を導き入れ、しかもそれを当事主体として捉えようとする。廣松は言う。「価値形態論におけるマルクスは『商品語』で論じているとはいえ、行文のなかに、当事主体を全然登場させないわけではない。[...] マルクスは、当事主体の対自的な意識を捨象しうるかぎり、『商品語』をリンネルに語らせる。そこには、当事主体の意識事態を勘案すれば、行論に無用の錯綜を持ち込みかねないという配慮があったのではないかと思われる。リンネルが『商品語』を語るということは、実際には、学知がフュア・ウンスな立場から“聴取”*vernehmen* することであり、しかも、語るのがリンネルであるということにおいて、視座がリンネル所有者の側に構えられているわけである。マルクスとしては、リンネルに商品語を語らせるという手法をとることによって、実はこのような方法論的地歩を確保している次第なのである。／これはまことに巧みな手法ではある。しかし、そこでは商品（リンネルおよび上衣）が擬人化され、当事主体の視座・視角が後景に退いてしまうため、論理の立体的な構造が見えにくくなるという憾みを反面では禁じえない」（同、pp.131-134、／は原文改行箇所）。このように見てくると、廣松にとって商品語というものは商品を「擬人化」し当事主体を後景化するための叙述上の「技巧」にすぎないことになる。彼もまた商品語をある種の比喩としてしか捉えてはいないことがわかる。なお、彼の商品所有者—当事主体に関する議論については機会をあらためて批判したい。

ところで、商品語を単なる比喩の次元にとどめることなく、真正面から取り上げて考察を試みようとした著作が公刊された。佐々木隆治『マルクスの物象化論——資本主義批判としての素材の思想』（社会評論社、2011年）である。われわれは彼の努力を多とせざるをえないが、佐々木もまた商品語を本質的に論ずる場面にあつて基本的に比喩という表現で語っており、比喩として捉える制約から自由ではない。そのため商品語それ自体を独特な対象として明確に措くことができず、人間語の世界に引き寄せて、あるいは人間語の世界に従属的なものとして商品語を扱っている。佐々木は「商品語はマルクスの価値形態論の到達点であり、その核心をなすものだと言って良い」（p.184.）との認識を示しつつも、商品語の把握に成功してはいない。佐々木によれば、等置関係〈リンネル＝上着〉において、相対的価値形態にあるリンネルが等価形態にある上着に対して語るのではなく、「むしろ、リンネルは上着によって語るのである」と言う（p.174.）。そしてこの内容を「つまり、リンネルが自らの価値表現のために能動的に上着に関係することで、上着はリンネルにとって自らの価値存在を表現するための『言語』となる。リンネルは自らの『思い』を『思い』のままに表出することはできない。あくまで上着と関係し、上着を『言語』にすることによってしかそれを語れないのである」と説明しようとする（同上）。だが、「上着が言語になる」あるいは「上着を言語にする」というこの命題はまったく説明とは言えず、むしろこれをこそ説明すべきであり、その

説明抜きには理解ができない。まさしくここに、商品語を捉え損なったことが端的に示されている。

- 3) マルクスは『資本論』第1巻、そして第2巻、第3巻のための草稿全体を通じて、商品、すなわち〈商品-貨幣-資本〉というトリアーデをなして運動する商品が、資本主義的生産様式が支配する社会・経済過程において、商品〈場〉の位相の転位・高度化に伴いますます主体としての力能を強め深化させていくことを、徹底的に解き明かしている。冒頭商品論以降、商品語という言葉は直接には用いていないが、商品〈場〉の転位・高度化に伴う商品語の〈場〉の在り様もまた転位していくことを示している。これを具体的に説くことは残された課題である。この点で、Marazzi, Christian, *Capitale & linguaggio: Ciclo e crisi della new economy*, Soveria Mannelli, Rubbettino Editore, 2001. という興味深い書名の本がある(邦訳は、水嶋一憲監修、柱本元彦訳『資本と言語——ニューエコノミーのサイクルと危機』(人文書院、2010年)、ただし2002年以降に再版されたイタリア語ペーパーバック版の一部では、副題が"Ciclo e crisi della new economy all'economia di Guerra"、すなわち「ニューエコノミーから戦争経済への循環と危機」となっている)。同書は、今日の資本、とりわけ金融経済を中心として資本主義の在り様を言語ということから説明しようとしたものである。だが残念ながら根底的に間違った貨幣論と、それに照応した「貨幣」を「言語」=自然言語に対応させる、よくある皮相な議論をベースにしたものでしかない。しかもマラツィの議論は、利子生み資本形態をとって運動する龐大な架空資本に基づく今日の資本主義の現状報告にすぎない。その意味で資本主義に拝跪したものであって、とても批判とはいえないものである。マルクスが『資本論』第三部草稿で駆使した利子生み資本の在り様を表わす *monied Capital* という概念(エンゲルスによってこの概念は事実上「抹殺」されてしまっていたのだが)を復権させ、〈利子生み資本-架空資本〉概念を用いた今日の資本主義にたいする根底的な批判が必要である。われわれは本稿の作業の上に、〈貨幣-資本〉における商品語の〈場〉、そして更には〈利子生み資本-架空資本〉における商品語の〈場〉を取り上げ、今日の資本主義への根本的批判を目指したいと考えている。
- 4) プレーズ・パスカル『パンセ』冒頭の断章「一」を参照のこと(前田陽一・由木康訳、中公文庫版、1973年、pp.7-10.; Pascal, Blaise, *Œuvres complètes II*; édition présentée, établie et annotée par Michel Le Guern, Paris, Gallimard [Bibliothèque de la Pléiade], 2000, pp.742-744.)。言うまでもないことだが、パスカルの時代にあっては「幾何学」とは論理学(現在の数学基礎論)を含めた「数学」総体を指しており、本文下段において分析哲学派の言語観に批判のページを割いたのはそのためである。
- 5) MEGA, II/5, S.639.
- 6) 「分節化する articulate」が音による区分、「縁付ける delineate」が線による区分として、前者が話し言葉の世界におけるものであるのに対して、後者は書き言葉におけるものと受け取られるかもしれない。かかる「理解」にあっては、後者の方がより概念化・論理化、したがって可算化の度合いが強いものとされる。しかしわれわれは対象(一自然・社会)に対する人間の実践として、単層的・線形(線状)的な「分節化する」よりも、「縁付ける」の方を多層的・非線形的に深化した、より豊かで奥行きをそなえた動詞としてとらえたいと考える。この考えをわれわれは、武満徹が自作『Marginalia』に寄せた次の一文から受け取った。武満は言う。「作曲という行為は、音にかりそめの形をあたえる、縁づける、ということではないでしょう。(…)縁づける、という私の行為の根底にある欲求が水のイメージと Marginalia という言葉を結んだのかもしれませんが。*たとえば、あるひとつの文章^{パラグラフ}にしても、また単語にしても、それらは自分の内面にまず現れるある形をもたないもの、つまり何かを見たときに自分の内面に反射してきて知覚される映像^{イメージ}に対して、自分がなんとかその縁を明確にしたいという気持ちのひとつの表れなのです。そのときに自分の内面に出てきたその不定形なモヤッとしたものにある方向を与えたり、明瞭な縁^{へり}をつけていくものというのは、単一のものじゃなくて、つねに多義的な多層なものである」(武満『音楽を呼びさますもの』新潮社、1985年、p.24.、原文中で*より前の部分は二字下ゲの形式で書かれている)。なお、delineate という語は放送大学教授・滝浦真人氏から教示を受けた。ここに記して感謝する。
- 7) フェルディナン・ド・ソシュール、前田英樹訳・注『ソシュール講義録注解』法政大学出版局、1991年、p.58。また、ソシュールの時間性と線状性、さらに言語をつらぬく同一性をめぐる思考とその「破綻」については、互盛央『フェルディナン・ド・ソシュール——〈言語学〉の孤独、「一般言語学」の夢』(2009年、作品社、pp.487-515.)を見よ。
- 8) G.W.F. ヘーゲル、武市健人訳『ヘーゲル全集 11 哲学史(上) 改訳版』岩波書店、1974年、p.356。

- 9) われわれが人間の言語世界について述べたものはもちろん単なるモデルでしかない。それはいかなるモデルもそうであるように粗さや乱暴さに満ちている。ただわれわれがこのモデルで強調したかったのは、人間の言語が対象世界を否定もなく縁付け・分節化するという可算化を遂行し、かくして対象世界の運動を切断し停止させ打ち砕き粗大化するものであるにもかかわらず、個々の語や句や概念等々自体も含めてそれらが生きたものである限り、そうした可算化と一体のものとして、その可算化の水準を超えていく運動すなわち対象世界を特徴づける非可算性を、自らの内に取り込むという点である。また、ここで述べる「詩的」とは、人間の言語の限界に向かって実験を繰り返してきた20世紀の諸表現運動を踏まえての謂いであり、たんなる喩ではないことを強調しておきたい。
- 10) パートランド・ラッセル、平野智治訳『数理哲学序説』岩波文庫、1954年、p.12。
- 11) 同上、p.19。
- 12) 同上、pp.20-21。
- 13) 同上、p.206。
- 14) 同上、p.222。
- 15) 同上、p.222。
- 16) 同上、p.221。
- 17) この対応を数学の言葉を用いて言えば、「実在世界から論理の世界への上への写像（全射）」という。
- 18) ラッセルは言う。「論理学（または数学）は形式だけの論究をするもので、しかもそれらが常に真であるとか、または時には真であるとか、あるいはまた常にはと時にはとをいろいろの順に排列し、その順序に真であることを主張したものについて論究するものである」（同上、p.261.）。
- 19) 同上、p.31。
- 20) 同上、p.37。
- 21) 同上、p.37。
- 22) 同上、p.37。／は原文改行箇所。
- 23) 1対1対応について、林晋と八杉真理子は「 B の各要素 b に、 A のある要素が写像され、 b に A の要素 x と y が同時に写像されていたら、 x と y は同じものである。（…）『一つ』という言葉が、『同じ』という言葉に置き換えられたのである」（ケルト・ゲーデル、林・八杉訳／解説『ゲーデル 不完全性定理』岩波文庫、2006年、解説p.111.）と述べ、「数1」の概念を用いずにその概念規定が可能だとする。しかしこれでは「数1」を用いていないことにはならない。なぜなら、 b 、 x 、 y が各々1個の b 、 x 、 y であり、「数1」の概念が措かれて初めて単独なものと規定しうる b 、 x 、 y だからである。そうでなければ、「 x と y は同じものである」という言明は、 x と y とがそれぞれ、あらかじめ無前提に1個でない限り（そしてここにも「数1」がある！）不可能である。
- 24) 吉田洋一『零の発見——数学の生いたち——』岩波新書、1939年。吉田は、数0の「発見」について敢えてその思想的哲学的方面を問題とせず、「技術的な方面から眺め」（p.22.）ることに徹しているが、しかしそこで「形式主義的数学思想」（同上）という抽象性という思想上の根本問題を取り上げることで、数0の深い反省的性質を吟味している。
- 25) 前掲『数理哲学序説』、p.11。
- 26) F.L.G. フレーゲ、野本和幸・土屋俊訳『フレーゲ著作集2 算術の基礎』、勁草書房 2001年、pp.133-140. を参照のこと。フレーゲの議論は本稿で取り上げたラッセルの著のそれよりも論理的に精緻であるが、しかしやはりラッセルと同様の循環論・トートロジーに陥っている。フレーゲは数0を同一律：「 A は A である」の否定：「 A は A でない」を用いて、「ゼロとは、「自己自身に等しくない」という概念に帰属する基数である」（p.136.）と定義する。これは結局、その推論過程がどのようなものであれ、あらゆる〈有〉の、だから〈有〉なるものの否定として〈無〉である数0を導出したということである。そしてこれを〈無〉＝数0の有化、すなわち数1化とする。フレーゲは言う。「1とは、『0と等しい』という概念に帰属する基数である」（p.140.）と。このようなフレーゲの議論には二つの極によって張られた人間語世界の内的運動が良く出ているが、それはともかく、彼もまたこの議論の前提として「1対1対応」概念を用いているのであって、やはり循環論・トートロジーに陥っているのである。
- 27) Ascher, Marcia, *Ethnomathematics: A Multicultural View of Mathematics*, New York, Chapman &

Hall, 1995. がその好例を多々示している。同時にその対照例として、オーストラリアの数学者／SF作家であるグレッグ・イーガンの「ルミナス Liminous」(1998;2003 山岸真編訳『しあわせの理由』、ハヤカワ SF 文庫、2003 年所収) とその続編「暗黒整数 Dark Integers」(2008;2012 山岸編訳『プランク・ダイヴ』、ハヤカワ SF 文庫、2012 年所収) を参照せよ。ラッセル以上に数学の一般的妥当性に〈信〉をおいた場合の思考様式の代表的な姿を看取することができよう。

28) ラッセル等の分析哲学派言語観の精神様式は、自然数論の〈完全性－無矛盾性〉へのきわめて強い〈信〉として現われているが、クルト・ゲーデル (1906－1978) の不完全性定理 (1931 年) はまさしくこれを根底から打ち崩したものであった。この定理を示した論文タイトルが「Über formal unentscheidbare Sätze der Principia Mathematica und verwandter Systeme I », in *Monatshefte für Mathematik und Physik*, Band 38, S.173-98, 1931 (前掲『ゲーデル 不完全性定理』岩波文庫, 2006 年, pp. 15-62.) というようにラッセルとホワイトヘッドが著した『プリンキピア・マテマティカ』を直接の対象として取り上げ、定理が「自然数論を含む公理系 (= 述語論理体系) P は、無矛盾ならば、形式上不完全である、すなわち、その証明もその否定の証明も可能ではない論理式が存在する」という意味のものであることはきわめて深い意味をもっている。つまり、「自然数論を含む」ということの意味である。しかもこのことに根源的に関連したきわめて重要な点は、ラッセルもその代表であるが、従来、命題の〈真－偽〉を問題にしていたのに対して、ゲーデルは証明可能かどうかを問題にしかの定理を導いたという点である。〈証明可能－証明不可能〉を問題にすることによって、明確に数学世界の内部においてこの定理を証明したのである。〈真－偽〉を問題にする以上この点が明確にはならないからである。まさしくだからこそラッセルは実在性にこだわり、非実在を論理学に導きいれることを峻拒したのである。〈真－偽〉を定める必要があり、その基準を論理学 (数学) 内部に据えることができず、その外部にある「実在世界」に求めざるを得なかったからである。こうした経緯を考えれば、人間の言語が可算である (可算でしかありえない)、という事態を深く考えるための最良・最高の素材が、論理学・数学基礎論における種々の議論・論争とそしてそれを決定的な地平へと開き出したゲーデルの業績にはあると言えよう。

29) 言語を論ずるにあたって、避けて通れないのは、ルートウィヒ・ウィトゲンシュタインの言語哲学、『『幾何学の起源』序説』(エトムント・フッサール／ジャック・デリダ (仏訳・序文)、田島節夫・矢島忠夫・鈴木修一訳『幾何学の起源 (新版)』、青土社、2003 年) を出発点とする J. デリダの言語観、および「言語一般および人間の言語について」における W. ベンヤミンの言語論 (細見和之『ベンヤミン「言語一般および人間の言語について」を読む』、岩波書店、2009 年所収の訳を参照した) である。それぞれの哲学・思想を本稿で全面的に論ずることは不可能なため、あくまで本稿でのわれわれの姿勢に即した批判のエッセンスのみを述べると、次のようなものとなる。①ウィトゲンシュタインの言語観 (= 言語哲学) の逢着点は、日常性への転換・自然史的観点への転換・「言語ゲーム」における機能主義的意味概念への転換、の三つの契機に基づく「人間における言語と生の不可分性」なる概念だが、この点において、ウィトゲンシュタインの言語観は、人間語の世界と対象世界 (一自然・社会) との隔絶を直観しつつも、前者から後者の〈呼吸〉の様態に無自覚であること (鬼界彰夫『ウィトゲンシュタインが考えたこと』講談社現代新書、2003 年、第 4 部とくに pp.227-256. を参照のこと)、②デリダはパラダイムの象徴例としてフッサールの「幾何学」をとりあつかっており、理念的客観性が伝承される体系、すなわちパラダイム化されることで対象性を獲得した「幾何学」に対する人間の思惟は、ウィトゲンシュタインと同様に、人間語の世界と対象世界 (一自然・社会) との隔絶を直観したところに滞留し、人間語の世界の「内部」に「差異の戯れ」を見出すにとどまっていること、③ベンヤミンの作品は後の論文「翻訳者の使命」と共鳴しあう「完全なる言語」への昇華を含み込むメシアニズムの美しい結晶として読み解きうる点で、人間語のもつ〈自然－社会〉へ開かれた超論理的詩的側面の極と結びつくとも言えるが、それでもなお「完全なる言語」という視座と志向は、人間語の世界から対象世界に対する〈呼吸〉についてあまりにも素朴な人間主義的態度を示すものであること。

30) MEGA, II /5, S.29.

31) 『資本論』初版で言えば第 1 章の「(2) 諸商品の交換過程」で次のようにマルクスは書いている (これはほぼそのまま第二版にもある)。「直接的な生産物交換は、一面では単純な相対的な価値表現の形態をもっているが、他面ではまだそれをもっていない。かの形態は、 x 量の商品 A = y 量の商品 B であった。

直接的な生産物交換の形態は、 x 量の使用対象 $A = y$ 量の使用対象 B である」(MEGA, II /5, S.54.; MEGA, II /6, S.116.)。

- 32) ここでは、資本主義的な価値物（商品）であるものだけを対象とし、そうでないものは対象外とする。たとえば、あれこれの名誉や地位などが売買されることがあるが、そのような価格のみを有する本来的に商品ではないものはあつかわれない。また、それとは別の次元で、今日グローバルにかつ大量に存在し運動している利子生み資本形態を取る架空資本（株式、国際、金融デリヴァティブ等）も本稿ではとりあげない。しかし架空資本は、現下の資本主義を分析する上で不可欠な対象であり、機会を改めて論じることとする。
- 33) MEGA, II /5, S.50. この文章も第二版にそのまま受け継がれている (MEGA, II /6, S.112.)。なお、引用文中の〔 〕内は引用者による。以下同様。
- 34) ここで用いている「限界 (Grenze)」と「制限 (Schranke)」は、ヘーゲルがいわゆる『大論理学』・『小論理学』において述べたものである（「第1部 存在」の「第2章 定在」の項を見よ）。許萬元はこの二者について、ヘーゲル弁証法の特徴の一つである歴史主義の問題とし、以下のように言う。「ところで、有限なもの内在的限界は、まさにあるもののあるものたらしめるところのものであり、あるもの自身の質的規定そのものをなすものである。つまり、ヘーゲルによれば、『あるものは、その限界内でのみ、また限界によってのみ、現にそれがあるようなものである』。したがって、注意されなければならないことは、あるもの内在的限界は、まだそれだけでは、それ自身にとってはなんら『制限 (Schranke)』とはならないということである。つまり、ヘーゲルはここで、『限界 (Grenze)』と『制限 (Schranke)』とを使いわけているのである。ある『限界』が『制限』となるためには、その『限界』を超出するもの、『無制限なもの』、つまり『限界』を否定するものが出現しそれに対置させられなければならない」（許萬元『弁証法の論理 上巻 ヘーゲル弁証法の本質』創風社、1988年、p.79.）。この書のなかで許萬元はわれわれと同じく、『資本論』初版における商品語の問題を「唯物論的抽象法」と名付けて把握しているが（同書、p.57.）、人間語との対比としてそれ以上の展開を見せてはいない。さて、上記の論点をマルクスは資本の運動総体においてとらえ、『経済学批判要綱』で次のように述べる。「自由競争が以前の生産諸関係および生産諸様式の諸制限を解体させたのではあるが、なによりもまず考察されなければならないのは、自由競争によって制限であるものが以前の生産諸様式にとっては内在的限界 [immanente Grenze] であったのであって、以前の生産諸様式はこの限界のなかでごく自然に発展し運動していたのだ、ということである。これらの限界は、生産諸力と交易諸関係とが十分に発展し、したがって資本そのものが生産の規制的原理として登場しはじめることができるようになったのちに、はじめて制限となるのである。資本が取り払った諸限界は、資本の運動、発展、実現にとっての諸制限であった。資本はそれによって、けっしていっさいの限界を止揚したのでも、いっさいの制限を止揚したのでもなく、ただ、資本にとって諸制限となっていた、資本に照応していない諸限界を止揚しただけであった。資本は、それ自身の諸限界の内部では——これらの限界は、より高度の見地から見れば生産の諸制限として現われ、また資本自体の歴史的発展によってそのようなものとして措定されるものであるにせよ——、自己が、自由なもの、制限をもたないもの [schränkenlos]、すなわち自己自身によってだけ、自己自身の生活諸条件によってだけ限界づけられたものだと感じる」(MEGA, II /1-2, S. 533.)。このマルクスからの引用については、許の指摘（前掲書、p. 220.）も併せて参照せよ。
- 35) 人間語世界の特徴に関して可算有限ということ述べたが、〈可算—非可算〉という概念対は数学世界のものであり、ゲオルク・カントール (1845–1918) によって概念として定立された (»Beiträge zur Begründung der transfiniten Mengenlehre«, in *Mathematische Annalen*, Band 46, S. 481-512; Band 49, S. 207-246, Berlin/Heidelberg, Springer-Verlag, 1895, 1897.)。可算世界には有限のものと無限のものとがあり、1、2、3、…と番号を付け得るものの世界であるが、これに対して非可算世界はそもそも無限であり番号を付すことのできないものの世界である。ただ非可算という概念は可算ではない、つまり可算の否定として概念規定されたものでしかない。ところで、カントールは、無限集合の無限性の度合を示す「濃度 (基数)」というものを考え、可算無限集合の濃度を \aleph_0 とし、以下、 \aleph_1 、 \aleph_2 、 \aleph_3 、……という具合に無限世界の無限の階層性を定式化した。つまり、カントールは非可算無限世界を可算無限階層化したわけである。この点から言えば、非可算無限世界の非可算無限階層化が考え得るのかどうか、それが可能だと

してどのようにそれをなすのかは今後の課題であろう。そしてこれは実数というもの、ひいては数というものをいま一度考え直し、新しい数概念を創り出すことでもあるだろう。またこれはおそらく自然に対する新たな理解の地平を開き出すであろう。

36) MEGA, II /6, S. 700.

37) MEGA, II /2, S. 128. 本稿注記にしたがって、改訳した。原文は“das Geldsein Aller Waaren”であり、“Geldsein”という語は“Werthsein”との対比としての表現であろう。

38) われわれは当然 MEGA, II のテキスト群およびそれらについての研究と論争およびその進展・深化に注目し期待している。ただし、本稿が対象とする冒頭商品論に関して言えば、今までのところ多くの成果があげられたとは言えない。注目すべき大村泉・宮川彰編著『メガ (MEGA) の継続のために マルクスの現代的探求』(八朔社、1992年)、大村泉『新 MEGA と《資本論》の成立』(八朔社、1998年)でも、冒頭商品論に関して十分な探究がなされているとは言い難い。だが、MEGA, II のテキスト群を丹念に検証すれば、マルクス自身が、さらにはエンゲルスが、たんに価値形態論の箇所だけでなく実に多くの部分に改定のための手を入れていることが判る。われわれは本稿の〈Ⅲ〉において、われわれ自身の解析結果を示す予定である。

39) 現在、『賃金、価格、利潤』として知られるこのテキストの原題は、本文中にあるように「価値・価格および利潤」であった。このテキストは1865年6月20日および27日の国際労働者協会中央評議会において、オーウェン主義者のジョン・ウェストンの経済主義に対する批判として用意され口頭で報告された。マルクスの生前には公刊されなかったが、『資本論』第一巻初版の前半部の要約としてとらえることができる。

井上 康 (京都精華大学非常勤講師)

崎山 政毅 (本学国際文化学域文化芸術専攻教授)